

海へ

小川未明

青空文庫

この村むらでのわんぱく者ものといえ、だれ知らぬものがなかつたほど、龍雄たつおはわんぱく者ものでした。親おやのいうこともきかなければ、また他人たにんのいうこともききませんでした。

よく友ともだちを泣なかしました。すると泣なかされた子供こどもの親おやは、

「またあの龍雄たつおめにいじめられてきたか。」

と、なかに怒おこつて親おやがわざわざ龍雄たつおの家うちへ告つげにやってくるものもありました。こんなわけで龍雄たつおの両りょう親しんは、わが子こにほとほと困こまつたのであります。学校がっこうにいる中うちは、成績せいせきはいほうでありましたけれど、やはり友ともだちをいじめたり、先生せんせいのいうことをきかなかつたりして先せん生せいを困こまらしました。しかし

しょうがつこう
小学校を卒業すると、家がどちらかといえは貧しかつた
ので、それ以上学校へやることができなかつたのであります。
龍雄は、毎日棒を持って村の中をぶらぶら歩いていました。

彼は乱暴なかわりに、またあるときは、優しく、涙もろかつたのであります。だから、この性質をよく知っている年をとつた人々には、またかわいがる人もあつたのであります。

親は、もう十四になつたのだから、いつまでもこうしておくわけにはゆかぬと考へていました。ちようどそのやさきへ、あるしんせつな老人があらまして、そのおじいさんはふだん龍雄をかわいがつていましたが、

「私の知つた町の糸屋で、小僧が欲しいということだから、龍雄

をやつたらどうだ、先^{せん}方^{ぽう}はみなしんせつな人^{ひと}たちばかりだ。なんなら私^{わたし}から頼^{たの}んであげよう。」

と、おじいさんはいいました。これを聞^きいた龍雄^{たつお}の親^{おや}たちはたいそう喜^{よろこ}びました。そして、さつそく龍雄^{たつお}をその家^{うち}へやることに決^きめました。

いよいよ家^{うち}から出^でて、他人^{たにん}の中^{なか}に入^{はい}るのだと思^{おも}うと、いくらわんぱく者^{もの}でもかわいそうになつて、もう二、三日^{にち}しか家^{うち}にいないというので、両^{りょう}親^{しん}はいろいろごちそうをして龍雄^{たつお}に食^たべさせたりしました。ある日^ひのこと、龍雄^{たつお}は母^は親^{おや}とおじいさんの二人^{ふたり}に連^つれられて、町^{まち}へいつてしまいました。

龍雄^{たつお}が村^{むら}にいなくなつたときくと、日^ひごろ彼^{かれ}からいじめられて

いた子供らは、みな喜び安心しました。もうこわいものがない
 と思つたからです。

彼の母親や、また父親は、

「いまごろはどうしているだろう。」

と、龍雄のことを思い暮らしました。すると、いつてから二、三
 日たったある日の晩方、突然、戸口に龍雄の姿が現れたから、
 両親はびつくりして、そのそばに駆けよりました。

「どうして帰つてきたか？」

と、母親は問いました。

母親は、なにか我が子が悪いことでもして出されてきたので

はないかと思つたので、こういう間も胸がとどろきました。

「黙だまつて帰かえつてきた。糸屋いとやなんかいやだ。もうどうしてもゆかない。」

と、龍雄たつおはいつてききませんでした。

「そんなことをいうもんでない。しんぼうしなくては人間にんげんにならない。謝あやまつて帰かえらなければならぬ。」

と、父親ちちおやも、母親ははおやもいいましたけれども、どうしても龍雄たつおはいうことをききませんでした。

母親ははおやの知しらせによつて、しんせつなおじいさんがさつそくやつてきました。

「いやなもののはしかたがない。さあ家うちへお上あがり。先せん方は私わたしからよくいつておく。また私わたしがよいところを捜さがしてあげるから。」

と、おじいさんはいいました。

村の子供は、龍雄が家に帰つてきたことを知ると驚きおそれま
した。また龍雄が外に出ると子供を泣かしてくるので、彼の母
親は心配し、気をもみました。

一日、しんせつなおじいさんが、龍雄の家へやつてきました。

「いいところがあつた。四里ばかり離れた田舎だが、なに、汽車
に乗ればすぐにゆけるところだ。大きな酒屋で小僧が入り用だと
いうから、そこへ龍雄をやつてはどうだ。」
「いいました。両親は、おじいさんの世話だから、安心し
てすぐにやることに決めました。」

「龍雄や、今度はしんぼうしななければならんぞ。」

と父親ちちおやはいいました。

龍雄たつおは、父親ちちおやに連れられて汽車きしやに乗のって田舎いなかにゆきました。

そしてやがて父親ちちおやだけが一人家ひとりうちへ帰かえってきました。龍雄たつおは田舎いなかに残のこされたのであります。

それから三、四日よっかたって、やはり日暮ひぐれ方がたのことでした。

「龍雄たつおさんが帰かえってきましたよ。」

と、外そとに遊あそんでいた子供こどもが家うちへ知らせにきました。両親ふたおやは顔かおを見合あわせてびつくりしました。そして外そとに出でてみますと、まさしく龍雄たつおでありました。

両親りょうしんはわが子こを家うちに入れてからさんざんにしかりました。

そして、なんで帰かえってきたか？ どうして遠とおいところを帰かえってきた

たか？ と聞ききました。

「俺は酒屋の小僧なんかになるのはいやだから家へ帰つてきた。銭がちつともないから鉄道線路を歩いてきたよ。」

と、泣きながら龍雄は答えました。

両親は、そのことをおじいさんに話しますと、おじいさんは笑つて、

「これは四里や五里の近いところへやつたのではだめだ。百里も二百里も遠いところへやらなければだめだ。」

といいました。

そのとき、ちようど都から、この村にきている質屋の主人が、
「そんなら、私どものところへ連れてゆきますが、奉公によこ

してくださらんか。」

といたしました。龍雄たつおの両親りょうしんは、幸いさいわいと思つて、その主人しゅじんに龍雄たつおを頼たのんで、都みやこへやることにしたのであります。

龍雄たつおはついに、その主人しゅじんが都みやこへ歸るときに、連つれられて都みやこにきました。彼かれはにぎやかで、四辺あたりがきれいなのに驚おどろきました。しかし、それも初めはじのうちだけでした。彼かれは、また故郷こきやうが恋こいしくなりました。母ははや、父ちちや、友ともだちや、遊あそんだ森もりや、野原のほらが恋こいしくなりました。恋こいしくなると、彼かれの性質せいしつとして矢も楯たてもたまらなくなりました。ある夜よ、店みせから抜ぬけ出た彼かれは、足あしの向むくままに、停車場ていしやばを指さしてやつてきました。けれども、もとより汽車賃きしやちんがなかつたので、どうすることもできません。見みますと、故郷こきやう

ほう た やこうれつしゃ
の方へ立つ夜行列車が出ようとしています。

かれ かしゃ なか
彼はせめて貨車の中にも身を隠すことができたなら、幸福だ
かんが
と考えましたので、人目をしのいで、貨車に乗り込もうとします
と、中から、思いがけなく、

「だれだ？」

こえ
と声がしました。そして 大 おお おとこ 男 が 龍 たつ お 雄 を とらえました。 龍 たつ お 雄 は
もう逃れる途はないと知りましたから、すべてのことを 正 直 しやうじき
にうちあげました。その男は酔っていました。

「しよのない奴だ。俺だから許してやるのだぞ。そんなら乗せ
てやる。そのかわり俺は眠るから、汽車がどの停車場に着いて
も、止まったときはきつと俺を起こすんだぞ。さあ乗れ。」

と、男おとこはいいました。龍雄たつおはよくその約束やくそくを守りまもました。そして翌あくるひ日の朝あさ、汽車きしゃが故郷こきょうの停車場ていしやばに着ついたとき、男おとこに別わかれを告つげて、男おとこのおかげで無事ぶじに停車場ていしやばからも出でることができました。

彼かれは両親りょうしんにしかられる覚悟かくごをして家うちへ帰かえりますと、圃はたけに出でてなにかしていた母親ははおやは、龍雄たつおの姿すがたを見みつけたとき、夢ゆめではないかとびつくりしました。そしてあきれました。独りひと両親りょうしんがあきれたばかりでなく、しんせつなおじいさんも今度こんどは笑わらいませんでした。手てを組くんでじつと考かんがえました。そして、しばらくしてから龍雄たつおに向むかって、

「おまえは、なにになりたいいつもりなのだ。」

と、おじいさんは聞ききました。龍雄は、両手をひざに置いて考
えていましたが、

「どうせ、故郷こきようにいることができないなら、いつそのこと海へ
いって船乗りふなのになりたいと思います。」

と答えました。これを聞くと、おじいさんは黙だまつてうなずきまし
た。

「なるほど、おまえの気質きしつではそうでもあろうか。いままで、私
どもが、なんにでもおまえをさせ得るものかんがと考えていたのがまち
がっていた。おまえの好きな途みちを、おまえはゆくがいい。」

と、おじいさんはいいました。

青い青い海あおあおうみはどうどうと波高なみたかく響ひびいています。見渡みわたすとはて

しもない。その後、海うみにいつて船乗ふなのりになつた龍雄たつおは、いま、どこを航海こうかいしていることでしょう。もう、彼かれは、故郷こきょうには帰かえつてこなかったのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「日本少年」

1918（大正7）年7月

※表題は底本では、「海《うみ》へ」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

2012年11月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海へ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>